２０１５年度学院留学　研究成果概要

種別：学院留学（長期）
所属・職・氏名：法学部・教授・塚田幸光
研究課題：冷戦文化の生成と映像表象研究
留学期間：2015 年 9 月 1 日～2016 年 8 月 31 日
留学先：国・都市：アメリカ合衆国・ボストン
　　研究機関：ハーバード大学ライシャワー日本研究所

研究成果概要

2015 年 9 月 1 日から 2016 年 8 月 31 日の 1 年間、米国ボストンのハーバード大学ライシャワー日本研究所(Harvard University, Reischauer Institute of Japanese Studies)に所属し、研究課題「冷戦文化の生成と映像表象研究」に邁進した。この間、サウスイースト・ミズーリ州立大学フォークナー研究所(Southeast Missouri State University/SEMO, Center for Faulkner Studies)で、BioKyowa Award を受賞し、2015 年 11 月の 2 週間、SEMO に滞在し、講演を行った。

ハーバード大学において、講演、シンポジウム、研究会などの告知は、メール配信される Harvard Gazette に集約される。毎日数多の講演等が開催され、ノーベル賞作家 Toni Morrison などビックネームの講演を除いて（これは予約が必要）、参加はすべて自由である。マサチューセッツ工科大学（MIT）との連携講座も多く、こちらも Harvard ID があれば参加できる。Gazette はジャンル別になっており、人文系ジャンル（映像、芸術、文学、文化等）には積極的に参加した。加えて、依田富子教授の研究会（ジェンダー文化論）と Alexander Zahlten 准教授の研究会（映画論）では、少人数の研究会ゆえ、大学院のゼミに参加するような交流ができた。そして、映画研究の大御所 David Desser 教授や、尾道三部作の大林宣彦監督がライシャワーで講演した折、懇親会後の少数ディナーでも交流を持つことができた（ライシャワーでは客員研究員の専門が合致する場合、ゲスト・ディナーに招待される）。ハーバード付属のフィルムセンターでは、映画のリバイバル上映やドキュメンタリー新作上映など、独自性のあるラインナップが展開された。上映後の監督講演も多く、その参加は得るものが多い。

付記すれば、ボストンという環境は、アメリカ研究者として最上の環境であったと言える。数多の歴史博物館や資料館、ボストン美術館やイザベラ・スチュアート美術館に加え、グレイター・ボストン（ボストン周辺地域）には、100 を超える大学があり、資

料収集には不自由しない。この留学以前から訪問しているケネディ図書館ヘミングウェイ・コレクション（マサチューセッツ州立大学内）も近距離にあり、短期間の渡米では不可能な研究成果を上げることができた。以下、米国滞在中の研究成果について、具体的に記す（あくまでこれは研究の一部であり、その成果の大半は、現在進行形の複数の単著で開示される）。

2015 年末から 2016 年初頭にかけての研究成果は、以下である。

(1) 【招待講演】 “William Faulkner, Hollywood, and the Gothic South,” Yukihiro Tsukada, The Center for Faulkner Studies, BioKyowa Award Lecture (Southeast Missouri State University) 2015.
(2) 【論文】「グッバイ、ローザ—フォークナー、ニューディール、「老い」の感染—」, 塚田幸光,『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』(松籟社)（査読無）, PP. 99-130, 2016.
(3) 【論文】「ゲイ・カウボーイと自閉するアメリカ—『ブロークバック・マウンテン』—」，塚田幸光, 『映画で読み解く現代アメリカ　オバマの時代』（明石書店）（査読無），PP. 160-173, 2015.
(4) 【論文】「ニューシネマ・ターザン—フランク・ペリー『泳ぐひと』と映像の性／政治学—」，塚田幸光,『アメリカ映画のイデオロギー　視覚と娯楽の政治学』（論創社）（査読無），PP. 300-325, 2016.

【講演(1)】と【論文(2)】は、フォークナー文学の文化論である。【講演(1)】は、SEMO での BioKyowa Award 受賞講演。アメリカ南部ゴシックの歴史とフォークナーのライティング・スタイル、そしてハリウッド時代のフォークナー・スタイルに関して、その相互作用と変遷を論じた。SEMO には、フォークナーに関連する数多の一次資料(The Brodsky Collection)が存在する。この資料を使いながら、その役割と意義に関しても講演した。【論文(2)】では、フォークナー文学とニューディールの文化政策の交差を論じた。ニューディールから冷戦期に焦点を当て、ヤング・アメリカの逆説が「老い」の表象に照射される点について議論した。

【論文(3)】と【論文(4)】は、ジェンダー表象に関する映画／映像論である。【論文(3)】では、冷戦後期、特に 1960 年代以降のカウボーイ表象の変容とジェンダー性／政治学との交差を論じた。カウボーイのジェンダー表象に注目し、ゲイ・カウボーイとアメリカン・ナルシス、或いは自閉するアメリカン・マインドとの関連を述べた。【論文(4)】では、1930 年代から 60 年代後半における「ターザン」表象の変遷とマスキュリニティとの関わりについて論じた。30 年代のワイズミューラー『類猿人ターザン』から、JFK 時代のランカスター『泳ぐひと』に至る男性身体の政治学に関して、スペクタクルと性に焦点を当てて分析した。

2016 年 3 月には、ハーバード大学で開催された国際学会 American Comparative Literature Association(ACLA)で発表を行った。【学会報告(5)】では、冷戦期から現代にかけての「核」表象に関して、日本コミックのゾンビ表象を軸に議論した。このパネルは “Ecocriticism in Japan: Season 2”という環境と文化論であるため、本発表は、核とゾンビのランドスケープ論と位置づけることができる。

(5) 【学会報告】 “Catastrophic Tokyo: Re-thinking the Nuclear Walking Dead in Japanese Comics,” Yukihiro Tsukada, American Comparative Literature Association, “Ecocriticism in Japan: Season 2” (Harvard University) 2016.
(6) 【シンポジウム報告】「大衆とフォト・テクスト—ニューディール、FSA、スタインベック—」，塚田幸光，九州アメリカ文学会第 62 回大会シンポジウム「アメリカ大衆文学とモダニズム」（九州大学），2016.
(7) 【シンポジウム報告】「ボディビル世紀末—Eugen Sandow と初期映画の身体論—」，塚田幸光，日本英文学会第 88 回大会シンポジア「メディア、帝国、19 世紀末アメリカ」（京都大学），2016.

2016 年 5 月には、シンポジウム報告のため、二度日本に帰国した。【シンポジウム報告(6)】では、ローズベルト大統領が行ったニューディールの「文化政策」、つまり映画／映像、写真、音楽、文学等々に関する文化のデータベース化について議論し、FSA 写真とスタインベック文学の交差について述べた。【シンポジウム報告(7)】では、司会・講師を務め、まず「メディア、帝国、19 世紀末アメリカ」のアウトラインを説明した。19 世紀末、映画が生まれた時代とは、帝国アメリカが躍動する時代であり、フォーディズムに象徴される大量生産とテクノロジーの時代であった。メディアと帝国が交差する時代に関して、5 名のパネリストをまとめ、自身は初期映画のアメリカン・アイコン、ユージン・サンドゥを取り上げ、身体と帝国の関係を論じた。

(8) 【学会報告】 “Hemingway and Cross-Media: Newsreel, Greco-Turkish War, and “On the Quai at Smyrna”,” Yukihiro Tsukada, XVII Biennial International Ernest Hemingway Conference, “Panel: Smyrna & Hemingway’s Political Development” (Dominican University) 2016.

2016 年 7 月には、米国ヘミングウェイ協会で発表を行った。【学会報告(8)】のタイトルにあるように、ギリシア・トルコ戦争とメディアとヘミングウェイ文学に関して、クロスメディア的視座から考察を行った。第一次大戦の後産、欧州の代理戦争としてのギリシア・トルコ戦争に対して、ヘミングウェイはジャーナルと小説を書く。これらに対して、同時代のニューズリールが如何なる役割を果たしたかを述べた。

以下の 2 つの国際学会と 1 つの国内シンポジウムは、帰国後、年内開催であるが、そ

の大半は留学中の仕事であり、留学の成果と位置付けることができる。

(9) 【学会報告】 “Framing Femme Fatale: Gender and Ideology in *To Have and Have Not*,” Yukihiro Tsukada, Faulkner and Hemingway Conference, “Faulkner and Hemingway in Hollywood II” (Southeast Missouri State University) 2016.

(10) 【学会報告】 “Danchi and Terrorism: Imaging the Nuclear Landscape in *The Man Who Stole the Sun* (1979),” Yukihiro Tsukada, The Association for the Study of Literature and Environment in Korea, “International Symposium on Literature and Environment of East Asia” (Dongguk University) 2016.

(11) 【シンポジウム報告】「Polluted but Beautiful—アトミック・ランドスケープの文化学—」，塚田幸光，日本映画学会第 12 回大会シンポジウム「＜汚＞の映画史」（大阪大学），2016.

【学会報告(9)】は、「フォークナー×ヘミングウェイ会議」（10 月 20 日〜22 日）における発表であり、ヘミングウェイ原作、フォークナー脚本の *To Have and Have Not*（映画版邦題は『脱出』）の生成プロセスとジェンダーの性／政治学について述べたものである。【学会報告(10)】は、文学環境学会のアジア大会（11 月）で発表するもので、映画『太陽を盗んだ男』（1979）を軸に、団地と核テロリズムと高度経済成長日本の関連を述べる。また、【シンポジウム報告(11)】では、映画学会シンポ「＜汚＞の映画史」（11 月）の司会・講師を務め、自身は「核」の映画表象の変遷とその意味に関して発表を行う。

上記の成果に加え、現在進行形のプロジェクトとして、単著『核シネマ』（水声社）、単著『シネマティック・サイボーグ』（ミネルヴァ書房）、単著『皮膚とジェンダー　映画の身体論（仮）』（臨川書店）の 3 冊の単著がある（2017 年度中に順次出版予定）。また、編著『映画のジェンダー／エスニシティ』（ミネルヴァ書房）は、2017 年 4 月に出版予定である。